

烈兎著「世界情勢が生む日本の好機」大機小機 日本経済新聞朝刊 2022年5月19日朝刊を読む

1. ウクライナを暴力的に強奪しようとするロシアは、地球上には人を殺すことに何の痛痒(つうよう)も感じないリーダーが存在する事実を見せつけている。
2. (1)一部には、米国や北大西洋条約機構(NATO)の思惑が、ロシアを侵略に駆り立てたとの言説もある。  
(2)だが、国際政治上の駆け引きやパワーゲームと、現在のロシアの暴虐を同じレベルで語る  
こと自体が誤りだ。  
(3)一方的に丸腰の市民を虐殺する行為を正当化できるものはない。
3. (1)新型コロナウイルス禍に続くウクライナ侵攻で、世界の価値観はいっそう混迷している。  
(2)つい最近までのグローバルスタンダードが機能しない分野が多くなっている。
4. (1)日本は国としての立ち位置をはっきりさせる必要がある。  
(2)資源や農産品の大半を海外に依存するため、これらの産出国である権威主義国家にも配慮  
しながら動いてきた。  
(3)が、それにも限度がある。
5. 民主主義陣営に属することを明確にしつつ、資源の確保と食料自給の方策を確立しなければなら  
ない。
6. (1)防衛力の強化は待ったなしである。  
(2)ミサイルで威嚇されるごとに「遺憾だ」と叫んでも、相手は全く応えない。  
(3)明白かつ現在の危険があることを、ロシアや北朝鮮は誇示すらしている。  
(4)他方、不安定でリスクを高める世界は、日本の製造業が再度飛躍する大きなチャンスだと思  
う。
7. (1)まずは脱炭素である。  
(2)小型で危険の少ない原子炉で時間を稼ぎながら、新エネルギー技術の開発に全力を挙げる  
べきだ。  
(3)ドイツとフランスの中間のような方策だ。  
(4)もともと優れた技術を持つ分野である。  
(5)水や水素など環境負荷の少ない原料の活用も楽しみだ。

(6)新エネルギー革命を日本がリードする意気込みで、政府の手厚い支援も欲しい。

8. 食料生産では、技術革新を伴った農林水産業に一段と注力すれば、新たな高付加価値産業を生み出せるはずだ。

9. (1)防衛産業にも力を入れたい。

(2)先端技術の結集であり、民需への波及も大きい。

(3)今日の世界情勢の下では、自力防備の放棄は無責任な逃避にすぎない。

(4)正面から防衛分野に取り組むことで、裾野が広く、底力がある日本の技術に磨きをかけてほしい。

10. (1)ただ、世界の動乱が、平和国家日本の救いになるのか。

(2)そんな嘆きの声も聞こえてきそう。

#### <コメント>

「世界情勢が生む日本の好機」は、あやふやであった日本の立場を明白にし、行うべきことをきちんと行って「ピンチをチャンスに」すべきだという考えで、極めてわかりやすく説得力がある。大いに参考にしたい。

2022年5月19日(木)